

えひめ 戦後70年

1945年8月6日の広島
島の原爆投下から70年の節
目を迎えるのを前に、愛媛

原爆の惨禍継承誓う

「広島で
つどい」愛媛大生ら決意



「愛媛の地で被爆者や戦争体験の話を継承していきたい」と決意を述べる愛媛大の学生＝5日午後、広島市中区

大の学生ら13人が5日、広島市中区の市文化交流会館で開かれた「核兵器のない世界のため被爆者と市民のつどい」（日本原水爆被害者団体協議会主催）に出席した。被爆者の体験談や平和への思いに耳を傾け、全国の被爆者ら約330人を前に悲惨な歴史を語り継いでいくことを誓った。

学生は、法文学部の和田寿

博教授が担当する「平和学」の受講生有志。胎内被爆者で同協議会代表理事の松浦秀人さん（69）＝松山市東長戸2丁目＝の紹介で参加した。1泊2日の日程で、6日は平和記念式典に出席する。

「ものすごい光を感じ、爆風で地面にたたきつけられた」。集いでは、爆心地から約1・8キロ地点で被爆した三宅信雄さん（86）＝埼玉県志木市＝が当時の様子を生々しく振り返った。皮膚が焼けた人が「痛いよう。熱いよう」とうめき声を上げ、防火用水に首を突っ込んで息絶えている人もいたといい、「広島の前爆の10倍もの威力の核兵器が世界中にたくさんある。国内外で核兵器廃絶を訴え続けた」と強調した。

核兵器廃絶の署名活動を進める広島県福山市の高校生や、核拡散防止条約（NPT）再検討会議が開かれたニューヨークを訪れた広島大学生らも複数参加し、平和の大切さを訴えた。

愛媛大生は「広島平和友好の旅」と記した横断幕を手に登壇。1年安藤咲笑香さん（19）は「貴重な話を聞くことができる最後の世代は私たちだと思つ。愛媛の

地で被爆者や戦争体験の話を継承していきたい」と声を響かせた。1年松岡優芽さん（18）は「私たちがどれだけ幸せに暮らしているか考えさせられた。70年前に広島が経験した事実を胸に生活していきたい」と率直に語った。

松浦さんは5日、広島市であった「胎内被爆者のつどい」にも参加し、公開シンポジウムのパネリストとして講演した。遺伝的影響への不安から恋愛や結婚について悩んだとし「時空を超えて被害をもたらした続ける核兵器の非人道性を訴えたい」と声を強めた。

（高田未来）